

馬鈴薯の花咲く頃

主婦 柳 万里子

■都会に暮らすことの多かった私は、何の予備知識もなく昭和20年9月、繰り上げ卒業と同時に北海道庁立帯広高等学校の家庭科の教師になった。

敗戦直後の当時の混乱と内地の惨状は経験者にしかご理解いただけないことと思う。

ともあれ満員鈴なりの青函連絡船で津軽海峡をこえて見ると、そこは緑豊かな別世界であった。特に穀倉地帯の十勝平野は、豆類や馬鈴薯、とうもろこし、南瓜の宝庫でぜいたくさえいわなければ、そして労力さえ惜しまなければ飢えることなき大地の恵みがあった。

もちろん、この恵み多き土壌の根源には、明治の頃の屯田兵たちの言語を絶する苦勞と開拓の歴史があることを忘れてはならない。また酪農を発展させ、馬鈴薯を研究普及させた先人たちの知恵と努力に感謝しなければならないと思うようになったのは年をとってからのもので、若い頃はただ毎日の授業をどう展開すればいいのかと孤軍奮闘の状態であった。

■教科書も指導要領もない。勤勞奉仕や学徒動員で殆ど勉強していないから、知識も技術も机上の空論のみで身についた生活力というものがない。

生活力といえば生徒たちの方が一枚も二枚も上手なのであった。幼い頃から家事労働を分担しているから逞しいのである。

全校あげての秋の炊事遠足で十勝川の河原へ出かけた時など、ただ圧倒されるばかりであった。

鍋釜、食材、薪、包丁、井など、それぞれ分担してかついでゆき、石をあつめて竈を作り、鮭をさばき、南瓜を叩き割り、忽ちにしている匂いを漂わせ、料理を仕上げてしまうのである。

後年、東京の女子高校に転職して林間学校で飯盒炊さんを指導した時は大変であった。教師達が手とり足とりめんどうを見てやらないと竈も築けず、火も燃えず、カレーライスでは完成しないのである。

■北海道の冬はきびしい。秋になると生徒たちはホームスパンの毛糸でせつせと手袋を編み靴下を編む。近頃は便利な生活に馴れすぎて、年々手先が不器用になり、0号針でレース編みを教えることなど至難のわざであろう。文明が進歩するのは結構なことであるが、一方ではこんなことでいいのだろうかと思うことが多い。

物を作り出すことが人間の喜びの一つであるとすれば、その点物資不足の昭和20年代は創意工夫の時代であり、リサイクル、リフォーム全盛で、どのような布・毛糸であれ大切に扱って利用しつくした幸福な時代であったのかもしれない。

■文部省から視学官が視察に来られたことがある。

研究授業をせよということで、こともあろうに未熟な私に白羽の矢が立った。ベテランの先生方は逃げたのだと、後になって気がついたのだが、さて、となると困ってしまった。

そこでクラスの生徒たち各自に代用食弁当

を工夫して作って持って来させて机上に並べ、発表させたり批評したりしている中に一時間過ぎてしまったが、東京の食料難から見れば羨しいほどの豪華版に見えたようで絶讃を博した。内容はマッシュポテトやおからの御飯、とうもろこし・餅黍^{もちきび}をじゃがいも澱粉^{でんぷ}でつないで焼いたもの、南瓜・山菜・豆類などをいろどりよく、姿よろしく詰合せた傑作ぞろいであった。

研究授業が成功したのもすべて生徒たちの実力と協力あってこそと今でも忘れ得ぬ思い出のひとつである。



■一方生徒たちがいまだに印象深く覚えていてくれるものにマッシュポテトのデコレーションケーキがある。

当時軍政下のGHQ・CIFは虚脱状態の日本の実状にあわないことを次々と押しつけて来た。各労働組合から4人宛社交ダンス講習会に出せとか、男子校とフォークダンスをさせて民主化をはかれとか、六・三・三制とか、びっくりすることが多々あった。帯広と旭川と札幌の女学校が家庭科のモデルスクールに指名されたのもその一つである。家庭クラブを作りホームプロジェクトをやらせて、日本の封建的な家庭生活をアメリカ流に清潔にして民主的・能率的に改善せよというような主旨であった。

帯広高女は農業学校と提携してその生産物をジャムにしたりピクルスに加工したり…などいわれてもとまどうばかりである。

時あたかもクリスマスが近く、私は作ったこともないデコレーションケーキに挑戦してみることにした。

台は各家庭に普及していたエントツパン焼器で焼く。といっても素朴な器具で下手にはあつかえない。生クリームはないから馬鈴薯をマッシュにして牛乳で練り、塗りつけた。絞り出しの技術はお菓子屋さんの父兄のところへ習いに行った。色づけは食紅と挽茶である。バラの花、つぼみ、葉っぱを絞り出してかざりつけると、一見おいしそうなデコレーションケーキが出現したという次第。しかし砂糖もバターも配給制の超貴重品であったからおいしいはずはなかったと思うけれど、生徒たちに夢を与えることは出来たのであった。私はすっかり忘れていたのに教え子たちが覚えていてくれることは教師冥利に尽きる気がする。本当に馬鈴薯にはお世話になった。

マリーアトソワネットが舞踏会の時うす紫の馬鈴薯の花を身に飾ったというエピソード、ドイツもアイルランドも飢饉から救われて人口が増加したという話、私たちが今日あるのもじゃがいものおかげなのだとあらためて敬意を表する次第である。

馬鈴薯の花咲く頃となれりけり

君もこの花を好きたまふらむ 啄木

〈投稿をお待ちします〉

- 当財団では「いも類振興情報」への皆さまからのご寄稿をお待ちしています。いもの作付・育成から加工・消費まで、幅広い範囲でのご意見を氏名・住所・職業を明記のうえ、お寄せください。
- 原稿は600字～1200字で当財団あてにお送りください。採用原稿には当財団の定めによる薄謝を呈します。ご協力のほどをお願いいたします。